

2.4. 一時的・永久的

(39) アトランティス大陸が 大西洋の海底に しずんだ。

(40) 村が ダムの底に しずんだ。

「しずむ」は、永久的、あるいは、かなり長い時間であるということが一般的に言えよう。それに対して、「もぐる」は一時的であると言えよう。この問題も、意志、無意志と関連する。「しずむ」は無意志的であった。自力で浮かぶ能力の無いものが主語となるのだから、永久に底にあるということになろう。「もぐる」は意志的であった。自発的に中に入ったのだから、再び自発的に出てくる可能性が強く、一時的であると言える。

2.5. 派生的用法

精神的マイナス面である、暗い、悲しい気持ちを表わすのに「しずむ」が用いられる例がある。

(41) 涙に しずむ。

(42) 悲しみに しずむ。

(43) 物思いに しずむ。

また、

(44) 不運に しずむ。

は、よくない状態に落ちこむことである。

3. おわりに

これまでの考察から言えることは、「しずむ」は、重力にしたがった流体表面から基底面までの移動が、意義特徴の中心的なものになっており、一方の「もぐる」は、まわりのものに取り囲まれるようにして外部から隠れた状態になることが、中心的なものになっているということである。そして、「もぐる」が、に格に、水、川、海などをとった時に、「しずむ」との類義性が生まれる。その時、二語の違いは、主体の意志の有無で説明できる場合が多かったが、例外もあった。いくつかの観点から分析してみたが、まだまだ残された問題は多い。

言語経歴：1957年4月東京都武蔵野市に生まれ現在に至る。

はぐ・はがす・むく

坂 東 多衣子

1. はじめに

国立国語研究所1964によると、「はぐ・はがす・むく」は「破壊、切断など」に、「はぐ・むく」は「包摂」の項目にわかれて収められている。ここで、これらの語をとりあげたのは、これらの語の使用に関して共通語と私の使用言語（高知）とのずれに気づいたためである。私の場合、「むく」という語は使用語の中ではほとんど稀な語であり、「ひざをすりむく」というような複合語の場合と、「目をむく」という慣用的な表現にしか使わない。ここではまず、私の内省により私の言語での「はぐ・はがす」の二語を分析してから、共通語の「はぐ・はがす・むく」の三語との比較分析を行なうことにする。方法としては、これらの語の使用例文をあげ、考察してゆくことにする。

2. 高知県高岡郡佐川町方言における「はぐ・はがす」

(以下、佐川町方言と略称する。)

2.1. 対象物

(1) 木の皮を はぐ。

(2) 木の皮を はがす。

(3) エビの殻を はぐ。

(4) エビの殻を はがす。

(5) 指の皮を はぐ。

(6) 指の皮を はがす。

(7) 爪を はぐ。

(8) 爪を はがす。

(9) 布団を はぐ。

(10) 布団を はがす。

(11) 瓦を はぐ。

(12) 瓦を はがす。

(13) 包み紙を はぐ。

(14) 包み紙を はがす。

(15) サロンパスを はぐ。

(16) サロンパスを はがす。

(17) 切手を はぐ。

(18) 切手を はがす。

(19) 障子紙を はぐ。

(20) 障子紙を はがす。

(21) りんごの皮を はぐ。

(22)^x りんごの皮を はがす。

- (23) みかんを はぐ。
 (24) ×みかんを はがす。
 (25) バナナを はぐ。
 (26) ×バナナを はがす。
 (27) 豆を はぐ。
 (28) ×豆を はがす。
 (29) ×パックを はぐ。
 (30) パックを はがす。
 (31) ×ペンキを はぐ。
 (32) ペンキを はがす。

上記の(1)~(32)の例文から、対象物による分類を試みる。(他の例も含めてあげることにする。)

○Aグループ:「はぐ・はがす」両方の対象物となるもの。

木の皮, エビの殻(他にカニの殻), 指の皮(他に背中・脛・頭・手等の皮), 爪, 布団(他に着物), 瓦, 包み紙, サロンパス(他にリバ・テープ, 蕎麦等), 切手(他にシール, セロハンテープ等), 障子紙(他に壁紙・ポスター, ふすま紙等)

○Bグループ:「はぐ」のみの対象物となるもの。

りんご(他にイモ・ジャガイモ・キューリー等の野菜, 梨等の果物), みかん, バナナ(他にとうもろこし, ふき, たけのこ等), 豆等

○Cグループ:「はがす」のみの対象物になるもの。

パック, ペンキ(他に塗料, ガム, 糊, セメダイン等)

2.2. 構文

「はぐ・はがす」は二語ともに他動詞であり、

〈主体ハ／ガ〉〈対象物ヲ〉〈手段デ〉〈本体カラ〉はぐ／はがす

が基本的な構文として考えられる。2.1.であげた例文は日常生活でよく使われる〈～ヲ はぐ／はがす〉の構文で示したものである。

Aグループは「はぐ・はがす」ともおきかわりうる例だが、使用状況は全く同じとはいえないように思う。

- (1) 木の皮を はぐ。
 (2) 木の皮を はがす。
 (3) 木の皮を 幹から はぐ。
 (4) 木の皮を 幹から はがす。

の四文を比較した場合、(1)は(2)よりも自然であり、(4)は(3)よりも自然であるように思える。B・Cグループ

にもカラ格を明示してみると、

(35) ×りんごの皮を 実から^{注(1)} はぐ。

(36) パックを 顔から はがす。

となり、(35)は言えないが、(36)は自然である。りんごの皮をむく時は、実からというのは当然のことなので言及する必要のないこととも関係があるのかもしれない。上のことは、各グループの他の語についても同様にいえることである。

2.3. 主体・手段

2.1.であげた例文の主体は人間と考えられるが、次のような例も可能である。

(37) 猿は 上手に バナナの皮を はいで 食べた。

このように、猿のような動物の場合も主体となりうる。また、「はぐ・はがす」の手段は、主として手, 指先, ナイフや包丁のような道具である。猿などが使うのも手, 指先である。

これまでは、対象物が具体的であったが、次のように抽象物をとる例もある。しかし、これは「はぐ・はがす」が対象物に具体物をとるといふ本来的な用法の派生したものともみたい。

(38) この新聞記事が 某国のペールを はいだ／はがした。

(39) 金田一耕助の鋭い勘が 富小路氏の仮面を はいだ／はがした。

そして、対象物を抽象物とした場合、その主体には抽象物もなりうるし、その手段は抽象物である。

(40) A記者は ペンの力で 某国のペールを はいだ／はがした。

(41) 金田一耕助は 彼特有の勘で 富小路氏の仮面を はいだ／はがした。

2.4. 対象物と本体との関係

対象物と本体との関係はその状態によってみてゆく。

(1)の木の皮は、対象物が本体の一部である場合と、本体をすっぽり包んでしまったような場合が考えられる。また(2)は、りんごの皮が本体をおおっている場合である。(3)では、上のいずれの状態も考えられる。つまり、対象物と本体の関係は次の二つの場合が考えられる。

①対象物が本体をすっぽりおおう場合。

②対象物が本体の一部の場合(ほぼ同じ大きさの場合も含む)。

①にはBグループが、①②にはA・Cグループがあてはまる。以上より、対象物と本体との関係は、①が

「はぐ」の特徴として、①②が「はがす」の特徴としてあげることができる。

2.5. 対象物の性質

Bグループ:「はぐ」のみがとる対象物は、野菜・果実類である。これは「はぐ」の語の持つ特徴と考えられる。

Cグループ:「はがす」のみがとる対象物は、対象物自身がくっつく性質をもつものである。これは「はがす」の語の持つ特徴と考えられる。

2.6. 行為に伴なう力・視点

「はぐ・はがす」の二語について行為に伴なう力を考えると「はぐ」よりも「はがす」の方がより強い力が必要である。かなり強い抵抗がある場合でない佐川町方言では「はがす」は使えない。

そして、「はぐ」の方は対象物は〈不用なもの〉であり、視点は〈中身をとり出す〉ことにある。「はがす」の方は、〈密着したものをひき離す〉ことに視点がある。

2.7. まとめ

以上から、佐川町方言における「はぐ・はがす」についてまとめてみると次のようになる。

- 「はぐ」:表面をおおっているものを本体から除去し、中身をとり出す行為。
- 「はがす」:密着してくっついている状態のものを本体からひき離す行為。

3. 共通語における「はぐ・はがす・むく」

次に、共通語におけるこれら三語の分析をする。ここにあげる資料は主として堀場千鶴子氏(1955~東京都足立区在住)の内省によるものである。分析の手順は2.と同様とし、主として佐川町方言と差異のある点について述べてゆく。

3.1. 対象物

- (42) 木の皮を はぐ / はがす / むく。
- (43) 布団を はぐ / ×はがす / ×むく。
- (44) 障子紙を はぐ / はがす / ×むく。
- (45) 爪を はぐ / はがす / ×むく。
- (46) サロンパスを ×はぐ / はがす / ×むく。
- (47) 切手を×はぐ / はがす / ×むく。
- (48) 瓦を×はぐ / はがす / ×むく。
- (49) パックを×はぐ / はがす / ×むく。
- (50) ペンキを×はぐ / はがす / ×むく。
- (51) エビの殻を×はぐ / はがす / むく。

- (52) 包み紙を×はぐ / はがす / むく。
- (53) りんごの皮を×はぐ / ×はがす / むく。
- (54) みかんを×はぐ / ×はがす / むく。
- (55) バナナを×はぐ / ×はがす / むく。
- (56) 豆を×はぐ / ×はがす / むく。
- (57) 指の皮を×はぐ / ×はがす / むく。

上記の(42)~(57)の例文で、対象物による分類を試みる。(他の例も含めてあげる。なお、対象物には、2.1.であげたものと同じものをあげるようにした。)

○Dグループ:「はぐ・はがす・むく」の三語に共通して対象物となるもの。

木の皮

○Eグループ:「はぐ」のみの対象物となるもの。

布団(着物)、頭の皮

○Fグループ:「はぐ・はがす」共に対象物となるもの。

障子紙(ふすま紙)、爪

○Gグループ:「はがす」のみの対象物となるもの。

サロンパス(他にリバ・テープ、膏薬等)、切手(他にシール、セロハンテープ等)、瓦、パック、ペンキ(他に塗料、ガム、糊、セメダイン等)

○Hグループ:「はがす・むく」共に対象物となるもの。

エビの殻、包み紙

○Iグループ:「むく」のみの対象物となるもの。

りんご(イモ・ジャガイモ・キュウリ等の野菜、梨等の果実)、みかん、バナナ(他にとうもろこし、ふき、たけのこ等)、豆、指の皮(他に手・背中等の皮)

3.2. 構文

共通語においても「はぐ・はがす」のとり構文は2.2.であげたものと同様である。しかし、「むく」は少し異なり他動詞であるがカラ格をとらない。つまり、〈主体ハ/カ〉〈対象物ヲ〉〈手段デ〉むくとなる。ただし3.1.でも2.1.と同様に例文は〈対象物ヲ〜〉という構文で示した。

では、カラ格と「はぐ・はがす」の共起関係について考えてみる。まず、共通語で「はぐ」と「はがす」が両方用いられる場合をみってみる。

- (44) 障子紙を はぐ / はがす / ×むく。
- (58)? 障子紙を さんから はぐ。
- (59) 障子紙を さんから はがす。

この場合、カラ格を明示すると「はぐ」の方は落ちつきが悪い。これは、木の皮が対象の場合も同様であ

る。

(42) 木の皮を はぐ／ はがす／ むく。

(60) ?木の皮を 幹から はぐ。

(61) 木の皮を 幹から はがす。

(62) ×木の皮を 幹から むく。

次に、「はぐ」のみ、「はがす」のみが使える場合を考えてみる。

(43) 布団を はぐ／ ×はがす／ ×むく。

(63) 布団を 体から はぐ。

(64) ?布団を 体から はがす。

(46) サロンパスを ×はぐ／ はがす／ ×むく。

(65) サロンパスを 体から はぐ。

(66) サロンパスを 体から はがす。

(66)は勿論自然な文である。(64)も〈～ヲはがす〉の場合いえなかった文がカラ格を明示することによって、落ちつきは悪いものの、許容できなくはない文となる。布団はEグループ、サロンパスはGグループの代表例としてあげたものなので、このことはグループの他の語にもあてはまる。

以上より、カラ格と共起する「はぐ」と「はがす」を考えた場合、共通語においても「はがす」の方がカラ格とより強く共起する点が指摘されるであろう。

3.3. 主体・手段

共通語でも「はぐ・はがす・むく」の主体としては人間および人間以外の動物が可能であり、「はぐ・はがす」では派生的な用法として2.3.であげたように抽象物をも対象とし、その主体には抽象物もなりうる。

(67) 猿は 上手に バナナの皮を むいて 食べた。

(68) この新聞記事が 某国のペールを はいだ／ はがした／ ×むいた。

(69) 金田一耕助の鋭い勘が 富小路氏の仮面を はいだ／ はがした／ ×むいた。

また、共通語でも三語とも主として手・指先・道具を手段とするが、抽象物をも対象とする「はぐ・はがす」は2.3.と同様、手段として抽象物もとりうる。

(70) A記者は ペンの力で 某国のペールを はいだ／ はがした／ ×むいた。

(71) 金田一耕助は 彼特有の勘で 富小路氏の仮面を はいだ／ はがした／ ×むいた。

3.4. 対象物と本体との関係

対象物と本体との関係も2.4.同様、①②の場合が考えられる。共通語の場合は「むく」の特徴として①が、「はぐ・はがす」の特徴として①②があげられる。

3.5. 対象物の性質

Iグループ:「むく」のみがとる対象物は、野菜・果実類であり、これは「むく」の語の特徴と考えられる。

Gグループ:「はがす」のみがとる対象物は佐川町方言では一種のみであったが、共通語では、次のような二種に大別できる。

(イ) 対象物自身はくっつく性質のものではないが、本体との接触面にくっつく役割をはたすようなもの(たとえば接着剤)が付着しているもの: サロンパスの類、切手の類、瓦。

(ロ) 対象物自身はくっつく性質をもつもの: パック、ペンキ類。

これらは、「はがす」の語の持つ特徴としてあげられる。

3.6. 行為に伴う力・視点

「はぐ・はがす・むく」の三語を考えた場合、行為に伴う力は、はぐ>はがす>むくの順に、「はぐ」が一番大きく、「むく」が一番小さい。「はがす」はその中間に位置するようである。

また、一般的に「むく」の対象物は〈不用なもの〉であり、視点は〈中身をとり出す〉ことにあるようである。そして、「はぐ・はがす」の視点は〈対象物を引き離す〉ことにあるようである。これらは既に、国立国語研究所1972(P79)、徳川宗賢・宮島達夫1972(P317)、柴田武1976(P139~P149)でも指摘されている。

3.7. まとめ

以上から、共通語の「はぐ・はがす・むく」についての分析をここでまとめておく。

○「はぐ」: 力を入れて、本体から対象物を引き離す行為。

○「はがす」: 密着してくっついている状態のものを本体から引き離す行為。

○「むく」: 力をあまり入れずに本体をおおっている対象物を除去し、中身をとり出す行為。

4. 佐川町方言と共通語との比較

佐川町方言の「はぐ・はがす」と、共通語の「はぐはがす・むく」を比較すると、次のような点が大きな差としてあげられる。

(1) 共通語の「むく」の部分が、佐川町方言では「はぐ」に対応している。

(2) 共通語では「はぐ」は、文章語的な感じを与え

るせいか、使用される事も非常に少ないが、佐川町方言では「はぐ」の使用範囲が広く、共通語で「はぐ」を使用する部分は勿論、「はがす」の占めている部分の一部にも「はぐ」が使用される。そのため、佐川町方言では共通語と比較して、「はがす」の占める部分が狭い。

(3)「はがす」の意味については、ほぼ差がない。

5. おわりに

今回、私の使用言語内の「はぐ・はがす」と共通語の「はぐ・はがす・むく」の比較考察を試みたのだが、これらの語に関連して、「とる」「のける」などをも今後考察してみたいと考えている。

注(1) この場合のカラは起点格のカラをさす。

りんごの皮を 端から 5cmはぐ。

バナナの皮を 端から 10cmむく。

というような場合のカラはとるが、これらは“順序助詞”とみる。なお“順序助詞”については、

詳しくは、奥津1967を参照されたい。

注(2) 佐川町の老年層の話者(男性1916生)によると、(1)~(28)の文はすべて「はぐ」のみの使用となり、「はぐ・はがす」が両用できるのは(29)~(32)となった。また「はがす」は昔はなかったことば」という内省があった。このことや、私の場合も共通語と比較して「はがす」の使用が少ないことを考えあわせると古くは、佐川町方言では共通語の「はぐ・はがす・むく」で担われていた部分に、すべて「はぐ」が使われていたのではないかと考えられる。そこへ、共通語の影響をうけて、私のように若年層では「はがす」という語をうけ入れてきているのではないだろうか。しかし、「むく」はまだまだ使用語の地位を与えられてはいないという現状なのであろう。

言語経歴：1954.5~1977.3高知県高岡郡佐川町 1977.4~横浜市港北区在住

ずらす・どける・のける

加藤久雄

1. はじめに

「ずらす」「どける」「のける」の三つの動詞は、次の(1)から(3)の文脈では類似した意味を表わす。

(1) タイプライターを置くために 机の上の本を 隅へ ずらした。

(2) タイプライターを置くために 机の上の本を 隅へ どけた。

(3) タイプライターを置くために 机の上の本を 隅へ のけた。

このことから、「ずらす」「どける」「のける」には、意味的に何らかの共通性があることが確認される。また、「どける」と「のける」の共通性については、次のようなことから確認することができる。例えば、

(4) タイプライターを置くために 机の上の本を 隅へ 退けた。

と漢字による表記がなされていた場合、「退けた」が有する三つの読みのうち、「しりぞけた」の読みは、とられないが、「のける」と読むか、「どける」と読むかは、(4)のような文脈では、判断がつかない。したがって、「のける」と「どける」は、ある文脈ではかなりの意

味の類似性があるといえる。

それでは、「ずらす」「どける」「のける」は、まったく同義であるかという点、例えば

(5) 警官は 事故車のまわりに集まった野次馬を どけた／のけた。

は、文法的な文であるが、

(6)× 警官は 事故車のまわりに集まった野次馬を ずらした。

とは言えない。また、「どける」と「のける」については、(4)でみたように、かなり類似性が高いと予測されるが、

(7) 雀の子 そこのけ そこのけ お馬が 通るの 小林一茶の句を

(8) 雀の子 そこのけ そこのけ お馬が 通る としては、語調が強く、どうも落ち着きが悪いなど、「ずらす」「どける」「のける」の三つの動詞が、まったく同義であるとは言えない。

そこで、これらの三つの動詞の用法を例文を通して比較することによって、この三つの動詞間に見出される示差的特徴を明確にし、その示差的特徴から導き出